



URL <http://e-jousenji.com/>

浄泉寺寺報

発行日 平成30年1月20日
 発行者 浄泉寺住職 赤羽根 證信
 住 所 大崎市岩出山字浦小路113
 電 話 0229-72-1168

峠

帰命と申すは如来の勅命にしたがう心なり

浄泉寺 住職 赤羽根 證 信

あけましておめでとうございます。本年も何卒よろしくお願いいたします。

平成の年も来年4月に、天皇が85歳で退位し、5月に新しい天皇(59歳)の誕生を迎えられます。天皇の在位30年は昭和64年1月7日、昭和天皇崩御を受け、明治、大正、昭和の大日本帝国時代、そして昭和20年、第2次世界大戦後の負の遺産をも引き継ぎ、昭和天皇の「常に国民とともに」の精神を受け継ぎ、貫き通す生き方だったと思います。

激戦地沖縄や南方諸島の小さな島々まで幾度となく足を運ばれ、皇后さまとお二人で深々と頭を下げられる姿や、東日本大震災を見舞われた折、避難所で、被災した人々にひざまずき、対等の目線で接せられたお姿に人間天皇の深い慈しみと聖人(ひじりびと)の様な尊厳ささえ感じています。

国のリーダーはかくあって欲しいと念ずるものであります。

一方、アメリカ大統領の「イスラエルの首都はエルサレムとする」の発言以来、世界各地で様々な動きがあり、根の深い問

題となっています。エルサレムの地は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教それぞれの聖地であり、3,000年このかた民族と宗教の紛争が絶えない都市です。加えて人種差別が当然のような所であると思っています。

本来、宗教は平和のシンボルであり「いのち平等」が当然な教えであるはずですが。宇宙から見れば、平和を戦い取るとはなんと愚かな人間なのかと思っていることでしょう。

私は10年ほど前「80歳まで現役で住職をつとめられたら……」と念願しておりました。今、その時を迎え「達成感ではなく、ご門徒の皆様に申し訳なさと、自分に対しての物足りなさ」を感じております。さて、これからの目標は……「与えられたことに、より一生懸命でありたい」と新たな意識で臨みたいものです。今年年頭にあたって、年賀状に「無事」とメッセージさせていただきました。無事であることは「お陰さまで」であり「ありがたいと思う心」であります。

合 掌

私的 沖縄への思い

浄泉寺 副住職 赤羽根 聡

イー ソーグッチデービル
クトゥシム ユタサルグトゥ
ウニゲーサビラ

（※文末に注釈）

ここ数日、沖縄に思いを馳せることが多くなった。

2016年12月14日、修学旅行で宿泊していたホテルのロビーに無造作におかれていた沖縄新報の朝刊は、見開き一面で、前日におこったオスプレイ墜落の記事を大きく取り上げていた。その日、私は普天間基地近くにある沖縄別院を訪ねた。別院の掲示板には「兵戈無用（ひょうがむよう：大無量寿経中、殺すなかれの意）基地もオスプレイもいらない」と書かれてあった。今般に限らず、毎日沖縄の人々は、オスプレイと向き合い、基地と向き合う苦しみを味わっているのだ。民家を改築してできたという別院に入ると、以前に東北別院でも輪番を勤めていた相良晴美師と久しぶりに会うことができた。子どもたちが得度をしたことや沖縄別院の歴史もそこそこに、やはり話の中心はオスプレイのことだった。1時間ほど話をした後、帰り際に私とすれ違ったのは現地の「9条の会」の方々だった。多忙を極めながらも、相良師の思いは着実に根付いている。

翌15日、チビチリガマを前に「沖縄風の会」の比嘉涼子さんの話を聞いた。物見遊山でいた一同は、比嘉さんの鬼気迫る話に、真剣に耳を傾けたのだった。それなのに・・・我々が訪れたチビチリガマが現地の若者によって無残にも荒らされるという事件が発生し、さらにオスプレイ墜落の1年後に、米軍ヘリの窓が普天

間第二小学校の校庭に落下する事件まで起きてしまった。

この沖縄の現状を見るに、平和とは何なのだろうと考えさせられる。「平和のための軍備」のようなことばが一人歩きする昨今、南郷・玉蓮寺の報恩講で、延塚知道師は「戦争という愚かなことをするのは人間だけなんや」としきりに説いていた。平和のためにできることは、互いを理解し、認め合い、いたわることに他ならないと思う。その互いを近づける力が「南無阿弥陀仏」にはあるのだと思う。さりながら煩惱具足の身、それが実感できないでいる毎日である。今年も多くの教えを聴聞したいと願っている。

合 掌

※冒頭文注釈：「いい正月ですね 今年もよろしくお願い申し上げます」の意で、「ユタサルグトゥ」は、特に年配の方に敬意を表する場合に使われ、「ウニゲーサビラ」は、方言としては比較的新しく、若い世代にも良く使われている。

お 知 ら せ

浄泉寺 平成30年の行事予定

- 1月16日10時 修正会
- 2月 浄泉寺・成願寺同朋の会研修
- 3月31日～4月1日
本山音楽法要参詣
- 5月（日時未定）春のつどい・帰敬式
- 6月（日時未定）護寺会総会
- 8月13～16日18時～ 万灯籠会
- 9月（日時未定）帰敬式受式者研修会

平成29年帰敬式受式者研修会実施報告



残暑の平成29年9月4日、帰敬式受式者研修会が実施されました。この研修会は同朋の会発足2年目の平成27年に始まり3年目となりました。

今年のスケジュールは昨年同様で、これまで受式された50名中26名（浄泉寺門徒は18名）が参加され、熱心に聴講されました。研修は、午前9時開式の後、真宗宗歌斉唱・正信偈同朋奉賛（勤行）と続く通常の儀式的な基本的な流れの形で、ご住職及び同朋の会会長よりあいさつを頂戴し研修へと進められました。

講師は、福島県いわき市明賢寺住職 藤内和光師で講題は「帰依三宝」。講義は昼食を挟み、午前午後共に1時間の予定で行われ、質問を受けながらその答えを解説する形で進められ、多少難しいとも感じられましたが、有意義なお話をいただきました。

また、この研修は毎年計画してまいりますので、まず、帰敬式を受式され、御同朋としての道を歩まれることをお願いいたします。

帰敬式は、毎年5月の「浄泉寺春のつどい」の中で行いますので、ご希望の方はご本人から直接住職にお申込みをお願いいたします。

浄泉寺住職 赤羽根證信

☎ 0229 - 72 - 1168

平成29年浄泉寺報恩講実施報告



平成29年11月23日、恒例の浄泉寺報恩講が実施されました。これは、親鸞聖人のご命日（11月28日）に合せ、聖人の徳を讃え、恩に報いる法座として全国の真宗寺院にて開催されております。

浄泉寺においては、毎年11月23日に実施しており、今年も大勢の方々のご参詣をいただき盛大な報恩講となりました。式は「真宗宗歌斉唱」に始まり「みんなでのお勤め」、庄司護寺会会長から「ごあいさつ」を頂戴し、その後「ご満座勤行」が執り行われました。ご満座勤行には仙台組内のご住職が十数名参集され、厳粛な勤行となりました。

続いて東北別院輪番清谷真澄師よりご法話をいただきました。師のご法話は今年で4回目となり、ご住職からの切なる願いもあって、「来年もまた…」の要請に応えられたとのことでした。

法話が終了し恩徳讃斉唱の後、お齋をいただき散会となりました。今年のお齋担当は柳町・通丁地区の方々と、同朋の会の応援も得て20名もの方にお手伝いいただきました。

その後、護寺会・同朋の会・地区担当の方々との懇親の場を設けていただきました。報恩講のために時間を割いていただきお手伝いくださいました皆様に、心から感謝申し上げます。

平成29年別院報恩講に参加して

10月16日、東北別院にて平成29年東北別院報恩講が開催され、浄泉寺から庄司寿夫護寺会会長はじめ4名が、会員のマイカーに乗り合わせて出発。午前9時過ぎに別院に到着し、各人受付を済ませて開式を待ちました。

当日は、少し肌寒い曇り空で、まずまずの天候でした。別院への参加者は、例年より少なめの70名程度で、用意された約130席の椅子も半数程度の空きがある状態でした。

5年前までは、この行事に合わせて成願寺門徒の皆さんと合同で、親睦を兼ねた1泊旅行も実施してまいりましたが、最近はそのも叶わず、昨年に続き任意の参加となりました。

式は16日10時からの「日中」、先ず勤行から始まりましたが、その中の正信偈が、普段浄泉寺では行われない「真四句目下」で行われたため、多少戸惑いを感じながらも、何とか追従し急場をしのぎました。

その後、法話へと続き、講師は真宗大谷派東京教区専福寺住職の二階堂行壽（ゆきとし）師。講題は「真のよりどころを求めて」と題し、「誰もが様々なよりどころを求めて生きている。その現実が必ずし

も正しいとは言い難い」「仏様からの呼び声である浄土をよりどころに下さい」との親鸞聖人の教えを説かれ、さらには、TBSテレビ番組の司会者として有名な阿川佐和子氏の講話の中にあったという例をあげ「知ることは、感じることの半分も役に立たない。たとえそれを覚えたとしても、それはその場で終わる」という言葉引用して「真宗を知ること」よりも「真宗に生きる」ことの尊さを解説されました。真宗に生きることの大切さを強く思い知らされた法話でした。

別院報恩講は、毎年11月15日から17日までの3日間行われ、浄泉寺では16日10時からの「日中」に参詣しておりました。来年も今年同様に開催されると思いますので、ご参詣をお待ちいたします。

（編集委員）

年回表 （平成三十年）	
一回忌	平成二十九年
三回忌	平成二十八年
七回忌	平成二十四年
十三回忌	平成十八年
十七回忌	平成十四年
二十三回忌	平成八年
二十七回忌	平成四年
三十三回忌	昭和六十一年
三十七回忌	昭和五十七年
五十回忌	昭和四十四年
百回忌	大正八年

あ

と

が

き

本尊は掛けやぶれ
聖教はよみやぶれ

これは「蓮如上人御一代記聞書」の中にある。若い頃参加した親鸞教室のメモ中にあった▼忘れないようにと書き留めたのだが……、忘れていた。大事な物を大切に保存することは誰にもあるのだが、長年忘れたまとは恥ずかしい▼冒頭の文の意味は「本尊（絵像）は紙がすり切れて破れるほど何度も繰り返し掛けなさい。聖教はすり切れて破れるほど何度も繰り返し読みなさい」とのこと▼蓮如上人が、質問された道西に対して仰せの言葉だが、筆者が可笑しく思ったのは、私がメモを大事に長い間仕舞ったままにしていたこと▼実は、先述の道西も蓮如の教えを大切にし、表具して保存していたそうである▼これに対する蓮如上人のお言葉
恩講講話中にあった「真宗を知ることより、真宗に生きること」の意味であろう。
（編集委員）